



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学総合博物館ニュース
Author(s)	湯浅, 万紀子; 成田, 佳子
Citation	北海道大学総合博物館ニュース, 30
Issue Date	2014-12-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57542
Type	book
File Information	MuseumNews_30_web.pdf





入館者100万人達成！

CONTENTS

- | | |
|----|-------------------------------|
| 01 | 研究報告
奇妙な恐竜「デイクェイルス」 |
| 02 | むかわ町との相互協力協定締結 |
| 03 | 企画展示
「学船 洋上のキャンパスおしよ丸」開催報告 |
| 08 | 2014年度前期 ミュージアムマイスター認定式 |
| 10 | 入館者100万人達成 |

研究報告

奇妙な恐竜「デインケイルス」

「恐竜のどのようなことを研究しているのですか?」という質問を度々受けることがあります。大きなフレームとして、恐竜を進化と環境という2つの見方で研究していると答えます。恐竜の進化に関しては、「爬虫類(恐竜)から鳥類への進化」と「恐竜の異端性・異常性」の2つあります。また、環境においては、「環太平洋に生息していた恐竜の多様性の変化」と「高緯度から低緯度までの恐竜の多様性と適応能力」の2点だと言えるでしょう。今年10月に、私は、世界の共同研究者と論文をイギリスのnature誌に投稿しました。「巨大オルニトミモサウルス類デインケイルス・ミリフィクスの長年の謎を解決」というタイトルです。これは、進化という意味でも環境という意味でも非常に大きな発見となりました。



図1 デインケイルスの産地(丸印)

今から約50年前の1965年、モンゴルのゴビ砂漠でモンゴル・ポーランド古生物発掘調査によって腕だけで2.4メートルもある巨大な恐竜の部分骨格が発見されました(図1)。1970年にデインケイルス(“恐ろしい手”という意味)と命名されましたが、腕と肩の骨そしてわずかな体の骨しか発見されておらず、今世紀最大の謎と言われる恐竜として知られていました。2006年から2010年まで、韓国の出資により、モンゴル科学アカデミーと韓国地質資源研究院を中心に結成された国際恐竜調査チーム

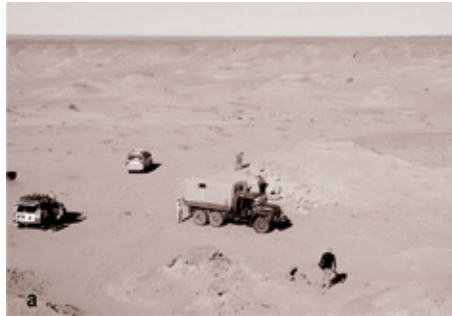


図2 2009年に発見されたデインケイルスの産地

(日本、カナダ、アメリカなど)により、モンゴルのゴビ砂漠で恐竜発掘調査が行われました(図2)。この調査中、新しく2体のデインケイルスの骨格化石が発見されるのです(図3)。



図3 aは、2009年に発見されたものとドイツからモンゴルへ返還された標本。bは、2006年の亜成体の標本。cは、2体をもとにした復元。スケールは1m。(Yuong-Nam Lee(KIGAM)提供)

私は、2006年にモンゴルの白亜紀後期から産出されたオルニトミモサウルス類のレビューを行い、デインケイルスを検証しています。分類が不確定だったこの恐竜の特徴を再調査し、デインケイルスはオルニトミモサウルス類に属す恐竜であることを提唱しました。ただし、典型的なオルニトミモサウルス類の特徴を持ちながら、非常に原始的な特徴を掛け合わせている変わった進化を遂げたものであり、全身骨格が発見されていなかった当時、議論は続きました。しかし、今回私たちの発見は、獣脚類オルニトミモサウルス類の恐竜であることを明らかにしたのです。そして、それだけではなく、この謎の多いデインケイルスの進化や生活がわかってきました。



図4 デインケイルスの復元画(Yuong-Nam Lee(KIGAM)提供)

デインケイルスは、全長11メートル、体重6.4トンだと推定しました(図4)。本来オルニトミモサウルス類は、体が華奢で走行性の優れた足の速い恐竜であることで有名で、最大でもガリムスの6メートルほどです。一方で、デインケイルスは不思議な進化をしたことがわかりました。デインケイルスは軽くなった体を走ることに使わず、巨大化へと利用し進化していきました。もと

もオルニトミモサウルス類の骨は空腔が多く、含気化・軽量化されていましたが、デインケイルスは含気化を極め、竜脚類に匹敵する含気化を成功させました。その結果、走行性を捨て、他のオルニトミモサウルス類にはできなかった巨大化を可能とし、ゆっくりと歩く恐竜へと進化したのです。

この発見により、デインケイルスは、私たちの想像を絶する、本当に変わった恐竜であることもわかりました。様々な恐竜の良いところを取った、キメラのような体をしていました。巨大化をした竜脚類のような軽量化された脊椎、スピノサウルス類のように大きな背中の「帆」、植物を食べるスペシャリストであるハドロサウルス科の様なクチバシといった特徴です。このような恐竜の寄せ集めのような例は他にはありません。また、大きな体やがっしりした足の骨と短い脛の骨から、デインケイルスは素早く歩くことができない、足の遅い恐竜であることがわかりました。さらに、お腹には多数の石が含まれ、植物を食べることが可能であったことが判明しました。長い腕で、植物を集め食べていたようです。お腹の中には魚の骨も含まれており、雑食性の恐竜だったようです。

では、デインケイルスがどうしてこのような寄せ集めの体をもったのでしょうか。私の仮説はこうです。そもそもデインケイルスが属すオルニトミモサウルス類は、ある程度骨が軽量化されています。その軽量化された体を利用して高い走行性を獲得したことが知られており、最も足の速い恐竜と云われています(推定時速60キロメートル)。しかし、その一員であるデインケイルスは巨大化の道を選びました。軽量化された骨をさらに含気化・軽量化したのです。巨大化に伴い、走行性が失われ行動範囲が狭くなります。あまり動かずに食べ物を食べるために、植物食性の機能を高めることになったのです。また、行動範囲が狭いことで、植物が花を咲かせるように、背中に「帆」という飾り(ディスプレイ)を付け、交配相手を見つけるのに役立てたと想像しています。これは、あくまでも仮説であり、これから研究を進めて、この奇妙な恐竜を解明していきたいと思ひます。

小林快次
(研究部准教授／古生物学)

むかわ町との相互協力協定締結



左から、小林准教授、津曲館長、竹中町長、金本教育振興室長

9月1日に胆振管内勇払郡むかわ町との相互協力協定締結式を執り行いました。当日は、むかわ町から竹中喜之町長、金本和弘教育振興室長、当館からは津曲敏郎館長、小林快次准教授、他、教職員が出席しました。

今回の相互協力協定は、2003年にむかわ町穂別在住の堀田良幸氏によって発見され、2013年に総合博物館とむかわ町立穂別博物

細川音治氏からの植物標本寄贈



寄贈された細川氏採集マシウヨモギ標本

館による第一次発掘が行われた恐竜化石の発掘を継続し、研究を進め、活用を図るにあたり、総合博物館とむかわ町がこれまで以上に連携を強化することを目的に締結されました。

今後はむかわ町における恐竜発掘のみならず、各方面における連携や協力の具体的な形態について別途協議を進め、相互の発展を目指すものとしす。

細川氏は長く弟子屈に在住され、北大植物園長だった故辻井達一教授の「郷土の自然は郷土人が地の利を活かす」という言葉を励みとして、阿寒湖・摩周湖や硫黄山の植物調査を熱心に続けてこられました。また、東大の原寛教授をはじめ、多くの植物研究者の野外調査を援助してこられました。

このたび、札幌に居を移されることに伴い、1963～2012年にかけて採集された道東産を中心とした植物標本およそ1,000点を当館植物標本庫(SAPS)にご寄贈頂きました。これらはすでに、一般コレクションの中に分類順に配架してあるので、研究用にどなたでも閲覧できるようになっています。細川氏にあらためて感謝申し上げます。

高橋英樹
(研究部教授／植物体系学)

展示公開
一時休止のお知らせ

総合博物館では、平成26年10月より耐震改修工事を実施しています。それに伴い、改修部分に該当する収蔵庫の学術資料等の一時保管場所として、1～2階の展示室の一部を閉鎖しました。また、平成27年度からは、正面玄関や外壁の工事及び足場の設置等のため、来館者の安全を十分に確保することが難しくなることから、展示室をすべて閉鎖し、公開を休止することといたします。工事終了後は、展示リニューアルを経て平成28年7月1日より公開を再開する予定ですが、詳細につきましては、決定次第改めてお知らせします。

公開休止中に予定されている各種事業等につきましては、総合博物館ホームページ等でお知らせいたします。ご不明な点や、詳細につきましては、北海道大学理学・生命科学事務部事務課 博物館担当(011-706-2658)へお問い合わせください。皆さまには多大なご迷惑、ご不便をおかけいたしますが、ご理解を賜りますようお願い申し上げます。

●展示室閉鎖スケジュール

平成26年9月末より閉鎖
展示室 1階南西奥6部屋

平成26年10月中旬より閉鎖
展示室 2階南西奥4部屋

平成27年4月1日より閉鎖
展示室 1・2・3階全室

夏季企画展示

「学船 洋上のキャンパスおしよろ丸」報告

●[水産科学館] 2014年5月20日～ 6月27日

●[総合博物館] 2014年7月11日～ 11月3日



オープニングセレモニー関係者（総合博物館）

水産科学館から始まった今年度の夏季企画展示「学船 洋上のキャンパスおしよろ丸」は、7月に札幌へ巡回し、11月3日(月・祝)に、目標を超える57,881人(水産科学館1,355人、総合博物館56,526人)の来場者を迎えて無事終了しました。

企画展示までのプロローグ

水産学部附属練習船「おしよろ丸」をテーマとした企画展示の構想から3年、企画展示実現に向けて多方面で取材をしてきました。長期航海に3度乗船し、船内活動取材してきました。新船おしよろ丸Ⅴ世の取材のために三井造船玉野事業所のある岡山県へも通いました。おしよろ丸の活動を来館者の方へ伝えるには、映像というツールは適していたと思います。この映像は、今回の企画展示だけでなく、大学の広報や水産学部の高校生向け説明会、OBへの紹介映像として活用されました。

企画展示の前年度、平成25年度には、プレイベントとしてイラストの募集を、全国地域を対象に行いました。10才から40才までの男女22作品が寄せられ、最優秀賞として松原将隆さんの歴代おしよろ丸が揃って大海原を航行している様子を描いた作品が選ばれました。松原さんへは、博物館の授業 博物館コミュニ

ケーション特論で制作されたミュージアムグッズと賞状、副賞として現金3万円が贈られました。博物館長特別賞には、天童市の小学生5名が選ばれました。

企画展示のオープニングは、函館、札幌とも個性的なセレモニーとなりました。水産科学館では、水産学部の学生、教職員が集まり、矢部衛水産科学館長、安井 肇水産科学研究院院長、高木省吾おしよろ丸船長が出席し、中原隆史さん(水産学部4年)の「学船出航」の合図でテープカットを行いました。水産学部応援団の学生からはエールが送られました。

一方、総合博物館では、ミュージアムマイスターコース学生参加プロジェクトのメンバーが司会進行を務め、チェンパロボランティア 浅川 広子さんのチェンパロ演奏やイラスト募集の表彰式等が行われました。セレモニーには津曲敏郎館長、三上隆副学長、高尾祐太さん(展示タイトル「学船」の命名者)、松原将隆さん(イラスト募集優秀賞)が出席し、函館水産科学館と同様、「学船、出航!」の合図でテープカットを行いました。

函館・札幌市内の幼稚園、保育園、小学校、中学校、高校へ企画展示のチラシを、一人一人にチラシが行き渡るように配布しました。これにより、両市内の人口の6割程度はカバーで

きました。地域の方に博物館の存在を知っていただき、おしよろ丸がどのような活動をしているか多くの方に関心を持っていただけたのではないかと思います。

15周年を迎えた

総合博物館の夏季企画展示

会期中、15回の映像解説を行いました。博物館ボランティアから発案されたワークショップも実施されました。寺西辰郎さんによるワークショップでは、展示室で実際にロープワークをレクチャーし、夏休み中の子ども達に人気でした。濱市宗一さんによるイカ飛行機制作のワークショップは、展示室が2階へ集約された後も続き、多くの来場者に好評でした。石黒弘子さんと石田多香子さん、塚田則生さん、西川笙子さん、森淑子さん、山下智子さんにもご協力いただき、子どもだけでなく大人の方々とテーブルに集まってイカ飛行機を作る様子が毎日見受けられました。

本企画展示に関連した活動は、ミュージアムマイスターコースの学生参加プロジェクトとして位置づけられており、函館では3名の学生、総合博物館では4名の学生が登録しました。彼らは、河合俊郎助教と湯浅万紀子准教授、私の指導のもと、オープニングセレモニーの準備や運営、展示解説を担いました。「ガクセン」と名付けられた屋外 TENT を水産科学館や総合博物館の正面入り口付近に設置し、屋外パネル展示も行いました。

学船展示開催期間中は、博物館だけでなく水産学部図書室や附属図書館でも応援展示をしていただきました。図書館職員の方、学生ボランティアの方には図書館らしい関連図書の紹介や展示映像、パネルで海洋研究やおしよろ丸について紹介していただきました。この場を借りて、お礼申し上げます。

企画展示「学船」は、屋外 TENT 内でパネル展示が行える巡回セット「ガクセン」として各地を巡っています。12月7日には関係者向けのおしよろ丸Ⅴ世縦覧が行われた横浜港大棧橋



3階企画展示室（総合博物館）

で、12月14日には小笠原諸島父島二見港にて公開されました。また、学生会館内(東京都千代田区)の七大学展示コーナー北海道大学ブースでは、おしよろ丸関連の展示が行われています。

おしよろ丸Ⅴ世が生まれた年に

出版された本

7月11日に書籍『学船 北海道大学 洋上のキャンパスおしよろ丸』が刊行されました。ミュージアムショップや書店でも販売され多くの方にお買い求めいただきました。専用アプリがインストールされた iPhone やスマートフォンで指定さ



学生による展示解説が行われた（総合博物館）



企画展示準備風景（水産科学館）

「植物細胞壁のミクロの世界」展 報告

●2014年6月24日～ 8月31日



「植物細胞壁のミクロの世界」展を6月24日から8月31日まで知の統合コーナーで開催しました。この展示は、文部科学省の科学研究費助成事業の一つである新学術領域研究「植物細胞壁の情報処理機能」の成果を扱ったもので、4月25日から6月18日までは東北大学植物園で開催しました。このような研究

れた掲載写真をスキャンすると動画が流れる AR 技術が採用されており、動くおしよろ丸も同時に見ることができます。

本企画展示は、市民の方々に加えて、本学関係者や海洋関係者が多く来場下さったことが大きな特徴です。また、函館、札幌などの地域を問わず、世界中の方を迎えることができました。オーストラリアからいらしたご夫妻は、ご子息が北里大学へ留学中におしよろ丸Ⅳ世の共同利用乗船実習に参加したとのことで、この展示を見るために来日されました。北海道大学を志望する高校生や現役学生、OBの方々は、改めておしよろ丸の歴史や活動のすばらし

さを感じ取っていただけたのではないかと思います。

北海道大学総合博物館分館 水産科学館

2014年5月20日[火]～6月27日[金]

来場者 1,355人

北海道大学総合博物館

2014年7月11日[金]～11月3日[月・祝]

来場者 56,526人

藤田良治

(研究部助教／博物館映像学)

ご来場下さった方々が、この展示により、植物細胞壁の知られざる側面を少しでも理解していただけたのなら開催者として嬉しい限りです。全面的にご協力下さった博物館の皆様にも、この場をかりて感謝を申し上げます！

巡回展

「植物細胞壁のミクロの世界」

2014年 9月9日～12月14日

・東京大学小石川植物園(東京都文京区)

2015年 5月

・日本科学未来館にてトークイベント(江東区)

2015年

・科学技術館にてトークイベント(千代田区)

・名古屋大学博物館

工藤光子

(立教大学理学部准教授)

角五 彰

(北海道大学理学研究院准教授)

タイ王国科学技術博覧会での
特別展示 報告

●2014年8月12日～ 8月28日

タイ王国科学技術博覧会(National Science and Technology Fair 2014)はタイ王国国立科学博物館(National Science Museum Thailand : NSM)が主催し、バンコクにて毎年開催されています。2014年の博覧会は初の試みとして、バンコク以外の都市チェンマイのCMICE会場(Chiang Mai International Convention and Exhibition Center)にて8月12日から28日まで開催されました。タイ王室、NSMや日本、米国、中国など各国の関係機関が参加し、最新の科学技術等が分かりやすく紹介され、期間中の入場者は85万人にのぼりました。

この博覧会において当館は、昨年につづく海外特別展示2回目となる「バイオメティクス展」を開催しました。この特別展示は2013年1月22日から3月17日に開催した企画展示を基に新しく作り直したもので、東北大学名誉教授・石田秀輝先生による日・タイ2カ国語の

解説パネル40枚、千歳科学技術大学教授・下村政嗣先生と当館が所蔵するバイオメティクス開発製品や関連標本などに加え、北大大学院情報科学研究科・長谷山美紀教授によるバイオメティクス画像検索システム・北海道映像システムの他、北海道庁の国際交流課によるパネル8枚、北海道大学国際本部による大学紹介パネル3枚も同時に展示されました。

8月12日には特別展示のオープニングセレモニーが執り行われ、タイ王国国立科学博物館のSakon Chanapaitoon館長代理と大原副館長によるテープカットが行われました。セレモニーの後、大原副館長が展示を解説し、参加者は生物を模倣し新製品を開発するバイオメティクス技術の説明に興味深く耳を傾けていました。

オープニングセレモニーに先立ち、大原副館長による特別講演「博物館自然史標本とバイオメティクス」を開催し、タイ国の研究者・学生約40名の参加がありました。

博覧会での特別展示は当館とNSMの多くの方々のご尽力により、大成功に終わりました。



タイ国チェンマイでの「バイオメティクス」展示

た。下村政嗣教授、長谷山美紀教授、石田秀輝名誉教授、タイ在住のさとううさぶろう様、また北海道庁国際交流課、北海道大学国際本部の皆様にはパネル、展示物等で多大なご協力をいただきました。末筆ながら御礼申し上げます。

大原昌宏
(研究部教授／昆虫分類学)

河合俊郎
(研究部助教／魚類系統分類学)

筑波大学芸術系との共同企画展示

「三岸好太郎と札幌の山―三岸好太郎作《北海道風景(大通公園)》(筑波大学所蔵)をめぐる」報告

●2014年9月6日～ 9月28日



展示会場

2014 年9月6日から9月28日まで「三岸好太郎と札幌の山」展を開催しました。本誌前号で筑波大学芸術系の寺門臨太郎准教授にご紹介いただいたように、筑波大学が所蔵する三岸好太郎の油彩画《北海道風景(大通公園)》が描かれた場所の謎をさまざまな角度から検証する企画でした。三岸の経歴、当該作品の展覧会歴、カンヴァスを張った木枠への「北海道帝國大學構内 三岸好太郎」という書き込みが発見された経緯、札幌の山の実景の検



ワークショップでの構内見学会

証などの解説パネルに続いて展示室で紹介された作品は、50年ぶりに札幌で公開されたこの1点のみでしたが、作品から放たれる力は強く、作品の前に長く佇む来館者が多く見受けられました。

9月14日に開催したワークショップ「三岸好太郎と北海道大学構内」には40名余りの熱心な参加者が集まりました。まず館内で、4名の講師による講演が行われました。寺門准教授による講演「作品《北海道風景》の観察をめぐるいくつかのこと」では当該作品の来歴をご紹介いただき、地家光二氏(北海道立三岸好太郎美術館館長)の講演「1920～1930年代、札幌美術瞥見」では三岸が生きた時代の札幌の美術界の様子をご説明いただきました。苦名直子氏(北海道立文学館学芸員)による講演「三岸好太郎と札幌」では三岸の作品解説だけでなく、その生涯、人的交流についてエピソードをまじえてご紹介いただき、池上重康氏(本学工学研究院助教)の講演「三岸好太郎のアトリエ―モダン建築創造のよここび」では、東京にある三岸のアトリエと北大構内・界隈の建築などについてもご説明いただきました。講演後、参加者は講師と共に三岸が当該作品を北大構内で描いたかもしれない場所に移動し、西の山なみを眺め、構内の古い図面も参照しながら意見交換しました。場所を特定することが関心の的ではありましたが、三岸が何を描きたかったのかに思いを馳せることの意味を実感したワークショップとなりました。本展覧会のポスターは、本学水産学部2年の雲中慧さんがデザインしました。

るいくつかのこと」では当該作品の来歴をご紹介いただき、地家光二氏(北海道立三岸好太郎美術館館長)の講演「1920～1930年代、札幌美術瞥見」では三岸が生きた時代の札幌の美術界の様子をご説明いただきました。苦名直子氏(北海道立文学館学芸員)による講演「三岸好太郎と札幌」では三岸の作品解説だけでなく、その生涯、人的交流についてエピソードをまじえてご紹介いただき、池上重康氏(本学工学研究院助教)の講演「三岸好太郎のアトリエ―モダン建築創造のよここび」では、東京にある三岸のアトリエと北大構内・界隈の建築などについてもご説明いただきました。講演後、参加者は講師と共に三岸が当該作品を北大構内で描いたかもしれない場所に移動し、西の山なみを眺め、構内の古い図面も参照しながら意見交換しました。場所を特定することが関心の的ではありましたが、三岸が何を描きたかったのかに思いを馳せることの意味を実感したワークショップとなりました。本展覧会のポスターは、本学水産学部2年の雲中慧さんがデザインしました。

湯浅万紀子
(研究部准教授／博物館教育学)

学生発案型イベント
“Hello, Museum!”の企画・実施・評価

●2014年7月18日・8月4日



夏の一晩、イベントが続くカルチャーナイト

7月18日と8月4日に、ミュージアムデッキで“Hello, Museum!”という学生企画のイベントを開催しました。この企画は大学院共通科目である「博物館コミュニケーション演習Ⅰ」受講生の大学院生7名と学部生1名が、湯浅万紀子准教授、藤田良治助教の指導のもと、計画・実行したものです。授業は、限られた時間と予算の中でどのようなイベントを企画するかの話し合いから始まりました。議論を重ねた末に計画を決定し、企画書を作成し、博物館教職員の前でプレゼンテーションを行い、承認後、Facebookや博物館ホームページで開催を告知し、ポスターを制作・掲示しました。

“Hello, Museum!”は「夏の夜、ちょっと博物館によってみない?」のコンセプトのもと、4つの小企画を行いました。この企画の目標は、(1)ふだん博物館を訪れない人が、当館へ足を運ぶきっかけをつくる、(2)次世代を担う小中高生に、当企画を通して博物館を身近に感じてもらう、(3)博物館が通常行っているアンケートでは収拾できない来館者の声を集約する、という3つでした。

7月18日は札幌市内を中心に文化施設などを夜間まで開放する「カルチャーナイト」が催され、当館でも「4Dシアター」などの特別企画が大盛況でした。北大カフェ・プロジェクトと協

力して開店した「博物館カフェ」は、来館者や放課後の北大生の憩いの場として気軽に利用してもらうことができました。「望遠鏡でのぞく世界」は主に小学生を対象とし、光の不思議を探る実験・望遠鏡工作・博物館ツアーを行い、7月18日と8月4日両日で計31名が参加しました。一所懸命に工作した望遠鏡でインシュタインドームのレリーフなどがきれいに見えると、感動もひとしおのようでした。総合博物館の大きな地図を用意し、その上に意見を書いたカラフルな旗を立ててもらう「はくぶつかん信号旗」では、2日間で計161名もの参加者が



4つのイベントで賑わうミュージアムデッキ

ら自由な意見を集めることができました。北大ミュージアムクラブMouseionと協力した「ぼんぼんおしょう丸、出航!」では記念撮影ブースを設置し、おしょう丸IV世のパネルの前で、水産学部生の乗船実習着と「おしょう丸帽子」を用意し写真を撮ってもらいました。

8月4日はオープンキャンパスの日でもあり、夏休みを謳歌する小学生や高校生で賑わいました。この日の「ぼんぼんおしょう丸、出航!」ではろうそくの火の力で動くぼんぼん船の制作ワークショップが行われました。制作後は船に名前を付け、命名書授与式を行い、プールで実際に走らせました。

そして企画両日にアンケートを実施し、計107枚のアンケートを集計しました。その結果から、当企画が総合博物館への来館をうながす役割を果たしたことがわかりました。ふだんあまり博物館に来ない方に来場していただき、非常に新鮮な場を作り上げることができたように感じています。最後になりますが、両先生、多方面でご協力いただいた方々、来場された皆様に、心より御礼申し上げます。

担当学生：遠藤理一・三宅美緒(国際広報メディア・観光学院修士1年)、木野瑞萌・柴田悠人・高田倫義・中嶋灯奈(理学院修士1年)、原田悠里(文学研究科修士1年)、雲中慧(水産学部2年)

遠藤理一
(国際広報メディア・観光学院修士1年)



さまざまな意見のフラグが立てられた「はくぶつかん信号機」

授業紹介

博物館コミュニケーション特論Ⅱ 映像制作夏の陣



ウェルカムモニターで映像を評価する

総合博物館では、夏と冬の年2回、大学院生対象に映像制作の授業を行っています。9月3日からは、「博物館コミュニケーション特論Ⅱ 映像表現夏の陣 博物館における映像表現」として、3日間の集中講義が行われました。それに先立ち、受講生は6月のガイダンスに出席して企画書の作成や撮影技法について学び、集中講義までに1人1作品、60秒の映像を制作するための企画書を提出し、メールで指導を受け、必要な映像素材を撮影しました。

授業では、テレビCMを見ながら、映像がどのように構成されているか、技術的な面を考慮

しながら考察し、自分たちの映像制作に取り入れました。また、事前に撮影した映像素材を見直し、もっと見やすく、きれいに撮影する方法も学びました。三脚を使用して撮影する基本的な内容から、光源によって被写体の色を補正するホワイトバランス、ピントの合う範囲をコントロールする被写界深度、撮影ポイントと心構えについての解説は、実際に撮影を行ってきた受講生には実感をもって理解できる内容となったようです。映像制作には、撮影の技術だけでなく、物事をまとめる力が必要です。受講生は多面的なモノの見方も同時に学び、編集

作業は附属図書館本館のリテラシールームの端末で行いました。

中間発表で発表された作品には個性的な内容の映像が多く、博物館の標本や展示物を「しりとりに」つなげていく映像、博物館を初めて訪れたときの感覚を表現した映像、博物館の夜のイベントをドキュメンタリーに仕上げた映像、博物館の建物に焦点を当てた映像など、視聴者の想像力をかき立てられる工夫が随所に施されていました。受講生はお互いが制作した映像を見ることで刺激され、よりよい作品に仕上げようと努力を重ね、最終日には、玄関ホール内のウェルカムモニターで完成作品を上映しました。受講生達の作品は、当館のウェブサイト内「Museum Media Lab」から配信され、優秀映像は、その後もウェルカムモニターで上映されています。

2月には、中央ローンでスノーボードと映像制作の授業が行われます。夏に学んだ映像制作とは異なる、映像に対する新しい発見が生まれることでしょう。

藤田良治
(研究部助教／博物館映像学)



館内を撮影する受講生

大学院生によるミュージアムグッズの企画と評価

2013年度の大学院共通授業「博物館コミュニケーション特論Ⅲ ミュージアムグッズの開発と評価」(担当:湯浅万紀子准教授、藤田良治助教)受講生により、2シリーズのグッズが開発され、ミュージアムショップで販売されています。この授業は、ショップを運営するエルムプロジェクトのスタッフにも参加していただき、グッズ制作者との交渉なども学ぶ社会体験型の実践的な内容となっています。これまでもこの授業からいくつものグッズが生まれました。

今回制作されたのは、「北の学者からのメッセージマグネット」(400円)と「雪肌あぶらとり紙」(250円)です。授業の中で、ミュージアムショップでのマーケティング調査を行ったところ、「女性にターゲットを絞った商品が少ない」、「お土産として購入しやすいグッズが欲しい」との意見が多く見られました。検討を重ね、あぶらとり紙の制作を決定し、5名の大学院生が、総合博物館の中央階段天井のアインシュタインドームをモチーフとしたグッズ制作を進めました。一方、日常的に使用でき北海道大学らしいグッズを開発しようと、7名の大学院生が、北海道大学を代表する研究者・教育者の名言をプリントした「北の学者からのメッセージマグネット」シリーズを制作しました。ノーベル化学賞を受賞した鈴木章名誉教授の直筆

色紙「精進努力」、札幌農学校(北海道大学の前身)初代教頭のウィリアム・S・クラーク博士の「Boys, be ambitious.」、札幌農学校教授、東京女子大学初代学長などを歴任した新渡戸稲造博士の「Be just and fear not.」をデザイン化しています。いずれも、大学院生の発想から生まれ商品化されたオリジナルグッズであり、大学院生による解説文が付されています。

彼らは店頭レイアウトも担当し、プレスや来店者向けにグッズを説明する日を設けてメディアの取材対応も行いました。更に、来店者へのインタビューを実施し、本プロジェクトの成果を検証し、商品開発に際して来店者ニーズを更に詳しく聞き取る必要があるという課題を明らかにしました。

担当学生: 児玉渉(情報科学研究科修士2年)・辻本愛・渡邊真紀(情報科学研究科修士1年)、天山隼希・石宮唯博・伊藤夏海・金子由実・佐藤光・高橋良輔・吉田大輝(理学院修士1年)、佐藤耶舞羽・新美恵理子(農学院修士1年)

湯浅万紀子
(研究部准教授／博物館教育学)



マグネット「北の学者からのメッセージ」シリーズ

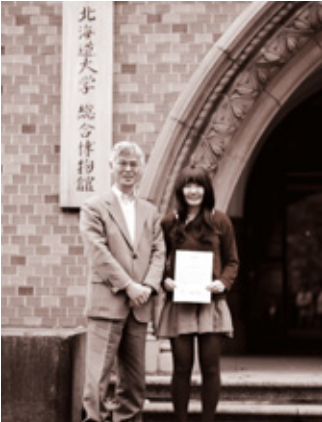
グッズを開発した大学院生達



2014年度前期

ミュージアムマイスター認定式

●2014年10月29日



津曲館長と、認定証を手にした山内さん

秋深まるなか、総合博物館で新たなミュージアムマイスターが誕生しました。24人目のミュージアムマイスターとして認定されたのは、水産学部2年の山内彩加林さんです。10月29日に認定式が執り行われ、博物館教職員やボランティアらが見守るなか、津曲敏郎館長から認定証が授与されました。山内さんは、「高校までは人前に立って活動することが苦手で、そうした経験もありませんでした。ミュージアムマイスター認定コースのプログラムを通してたくさんの人々に関わる機会を持ち、自分の新しい一面を開拓できました。これからも頑張りたいです」と顔をほころばせました。式に出席したボランティアの濱市宗一さんと森淑子さんは「これからの活躍も楽しみです」、同コースや北大ミュージアムクラブMouseionで共に活動している水産学部2年の岩崎峻さんは「同じクラブ、同じ学年の人間としても、山内さんの認定はとても喜ばしく誇りに思います」とコメントしました。山内さんは12月に開催される鈴木章名誉教授と子ども達との実験交流イベント「サイエンスパーク in 北海道大学」で司会・進行を務めます。以後も全学的なイベントなどでの活躍が期待されます。

「ミュージアムマイスター認定コース」は2009年度に設置され、本学が目指す全人教育の一貫を担う教育プログラムを展開しています。本プログラムへの登録は随時受け付けております。詳細は総合博物館Webサイトをご覧ください。<http://www.museum.hokudai.ac.jp/education/index.html>

高橋一葉
(研究支援推進員)

北海道大学総合博物館を中核とした実物科学教育の札幌圏モデル
～CISE ネットワークの活動～

当館では、2012年7月より独立行政法人科学技術振興機構の支援を受け「科学系博物館・図書館の連携による実物科学教育の推進～CISE（Community for Intermediation of Science Education）ネットの構築～」事業を推進しています。この事業は、札幌周辺の各自治体（札幌市、小樽市、石狩市、北広島市）の博物館・科学館・動物園・水族館などの教育施設や団体（参加機関）が連携して、地域住民に博物館の標本や資料を活用した実物科学教育を進めるものです。この2年3ヶ月で、札幌周辺の自然史系博物館や環境関連施設と図書館など20の施設や団体が加わったネットワーク（CISE ネットワーク）が構築されました。

CISE ネットワークでは、参加機関の学芸員・飼育員・司書と本学の研究者がワーキンググループ（作業部会）を作り、連携講座や教材開発などの事業を展開しています。2年間で8つのワーキンググループ（ヒグマ、サケ、恐竜、

セミ、岩石、海獣、バイオミメティクス、ホタル）が発足しました。その結果、2014年度には30回の連携講座を実施し、8種類のトランクキット（標本や資料をコンパクトにした持ち出し可能な教材キット）が作られる予定です。また、当館が10年に渡って進めてきたパラタクソノミスト養成講座をこのネットワークを通じて地域で広く展開できるようになり、地域に専門的な博物館の資料を活用できる知識や技能を持った人材の養成が進み、この2年間で延べ650人の方が受講しました。

2014年度は、新たに図書館振興財団から助成を受けて、小・中学校での活用を目的とした支援教材「調べる学習支援トランクキット」の開発を進めています。このような学習支援教材は、今まで多くの博物館が作製していますが、あまり活用が進んでいません。トランクキットを普及させるには小・中学校教員のニーズに沿っていない、博物館からの学校までの搬

送に関わる手間や費用がかかるなどの課題があります。そこで、今回の「調べる学習支援トランクキット」の開発は、小・中学校の現職教員が加わった検討委員会を設置し、トランクキットで整備する内容と小・中学校までの搬送方法についての検討をするようにしました。その結果、小・中学校の具体的な活動に活用できる学習支援教材の整備が進みました。また、小・中学校へは、図書館から各学校へ配送できるシステムを作ることで、搬送方法の問題を解消しようとしています。

CISE ネットワークは、当館が事務局となったことで、今まで自治体や組織を越えての連携が進みました。そして、大学が「専門的な人材や資料」、公共施設が「地域住民への科学教育を進める場」を提供し地域住民への科学教育を推進する「実物科学教育の札幌圏モデル」が出来上がりつつあります。

菊田 融
（学術研究員）



写真左：サイエンスフェスティバルでの出展ブース
写真右：外部評価委員会の様子



2014年度
第1回ボランティア講座 & 交流会
●2014年6月8日



北洋航海の取材映像の解説

6月8日に2014年度第1回ボランティア講座 & 交流会を開催しました。9分野から9名のボランティアの方が参加して下さいました。

講座では、藤田良治助教が開拓している新たな研究分野である博物館映像学の研究枠組みの説明の後、函館キャンパスの水産科学館で開催中の企画展示「学船 洋上のキャンパスおしよ丸」の内容や広報戦略についての説明がなされました。水産科学館に続いて7月に札幌キャンパスで開幕する展示内容がいはやく紹介され、開催への期待が高まりました。そして、3回にわたって乗船した北洋航海と小笠原航海での取材内容について、写真と共にエピソードを多数まじえて説明していただきました。準備に2年をかけて臨んだ撮影、長

期間の航海での取材の苦労、取材対象者との信頼関係の構築など、きめこまやかな取材の実際を知ることができました。最後に、水産科学館で上映している作品のなかから、「研究」編と「仕事」編が詳細な解説を加えて上映されました。講座は参加者からの質問に随時お答えする形式で実施され、船上での研究、教育、仕事全般や、おしよ丸Ⅳ世の行く末とⅤ世の予定、映像取材の方法などについての質問に一つ一つに丁寧に答えいただき、充実した時間になりました。

湯浅万紀子
（研究部准教授／博物館教育学）

入館者100万人達成
●2014年7月25日



100万人目の来館者となった青柳さん親子

当館は開館15周年にして100万人目の来館者を迎えました。

開館10年目の平成21年10月には来館者数は累計50万人でしたが、平成23年には70万人の来館者を迎えました。来館者数は年々増加傾向にあり、昨年度は1年間に12万人以上の来館者を迎えました。

そして今年7月25日、100万人目の来館者となったのは、青柳元子さんと久信くん（小学4年生）親子です。久信くんは初めての北海道で、ガイドブックで当館を知り、午後の飛行機で帰る前に立寄ったそうです。100万人目に選ばれ、「とてもうれしいです」と喜んで下さいました。

セレモニーには山口佳三総長も出席し、最初の挨拶と花束を、津曲敏郎館長からは大学院生が開発したミュージアムグッズが記念品として贈呈されました。司会はミュージアマイスターの木野瑞萌さんが務めました。研究支援推進員がこの日のために制作した手づくりのくす玉が割られ、100万人目を祝いながらも、次の目標200万人、1,000万人を目指した一歩を踏み出しました。

博物館の印象・興味を引いた所を聞くと、久信くんは「恐竜にいろいろな形があって面白かった」、元子さんは「建物にすごく歴史を感じるので、是非このままの姿を残して欲しい」と語って下さいました。

藤田良治
（研究部助教／博物館映像学）

中谷宇吉郎博士関連展示
ガイドツアーおよびスライド上映会

札幌国際芸術祭の連携事業として「北大理学部教授室N123 中谷宇吉郎研究室」のガイドツアーおよびスライド上映会を実施しました。

雪の研究で知られる中谷宇吉郎が30年間過ごした当館には、彼の研究室が復元展示されています。しかし、残念ながらこの度の耐震改修工事に伴い、N123室は現在の形での公開が困難になることが判明しました。そのような折に津曲館長から戴いたのが札幌国際芸術祭2014の連携事業。早速関係者で話し合い、ガイドツアーの実施に踏み切りました。

ガイド内容は下に記すような順序で行いました。

1. 中谷宇吉郎関連の常設展示物の紹介
2. 復元研究室にご案内し、現役当時の様子を紹介
3. 人工雪誕生の碑をご案内

ガイドは筆者ら3名だけであるため、毎日行うことは難しく、芸術祭期間中の土日14日間に限って実施することにしましたが、午前午後各1回ずつ行った結果、ツアーの総計は28回に及びました。ツアー1回当たりの参加者数は、宣伝不足のためか8月半ばまでは10名を超えることはありませんでしたが、北海道新聞に取り上げていただいたり、芸術祭の中谷宇吉郎展示などで宣伝していただいたりした後は、20名を超える大変にぎやかなガイドツアーになりました。



スライド上映会風景。中谷兄弟が投影されている。

そして回を追う毎に増える参加者数に後押しされ、また、札幌国際芸術祭の最終日を彩るイベントとして、中谷宇吉郎の写真300枚を用いたスライド上映会を実施しました。こちらも午前午後各1回ずつ実施し、50名ほどの来館者に鑑賞いただきました。

最終的に当企画への参加者総数は349名となりました。参加して下さいた皆様からは、復元研究室を現状のまま残せない状況を惜む声やリニューアル後のさらなる発展を望む声などを頂戴しました。

当企画の実施に当たり、芸術祭関係者の皆様をはじめ、受付や研究支援推進員、事務補佐員の皆様にお骨折りいただきました。この場をお借りして感謝の意を表します。

山本順司
（研究部准教授／地球科学）

松枝大治
（資料部研究員）

山崎敏晴
（ボランティア）



常設展示の解説風景

宇宙の4Dシアター公演報告



公演で取り上げた古生物展示の解説風景。

宇宙の4Dシアターボランティアでは、本年7月から9月にかけて毎月公演を実施しました。

7月18日のカルチャーナイトでは、恒例となっている「天かける単身赴任 ～織姫と彦星の物語～」を2回上映しました。例年通り大変多くの方に参加していただき賑やかなイベントになりましたが、超満員のため一部の方が入場できない事態となってしまいました。

8月2日に3回行った公演のタイトルは「宇宙のかたすみの生命史」。小惑星と生命の進化を関連付けた内容です。そして、上映後に展示室を案内し、内容に関連した展示物を紹介しました。展示との連動を模索し、4D公演をきっかけに展示内容への理解を深めていただくことが狙いでしたが、公演後のアンケートでは上映内容だけでなく、展示の紹介にもご好評をいただきました。

9月14日には、こちらも恒例となりつつある月に関する公演を「月の物語」というタイトルで2回実施しました。今年はシナリオをさらに拡充させ、子供から大人まで楽しめる内容になりました。しかも今年は中秋の名月(9月8日)とスーパームーン(9月9日)がほぼ重なる稀な年に当たりましたので、多くの方に関心を持っていただけたに違いありません。

このように、当ボランティアでは時季や学事に合わせたユニークな公演を行っています。皆さんも一緒に宇宙を旅してみませんか？

山本順司
(研究部准教授／地球科学)

ポプラチェンバロコンサート

1F「知の交流」コーナーでのボランティアによるポプラチェンバロ演奏はボランティアの皆さんにより随時行われ、多くの来館者からご好評をいただいています。企画コンサートも活発に企画され、6月1日(日)に「ポプラチェンバロで奏でる初夏のコンサート」、7月18日(金)には毎年恒例となったカルチャーナイト「チェンバロと星空のタベ」を開催し、ボランティアの皆さんとゲストが演奏を行いました。毎回、会場から溢れるほどのご参加をいただき、バロック音



楽や現代曲などの多彩なプログラムをお楽しみいただいています。

(事務室)

北大ミュージアムクラブ
Mouseionによる
大学祭での展示解説

●2014年6月7日・8日



ヒグマの体長が博物館の天井ほど高いことを説明する

6月5日から8日の日程で開催された第56回榆陵祭(北大祭)で、北大ミュージアムクラブMouseionが展示解説を行いました。Mouseionは、総合博物館から支援を受けて博物館を舞台とした活動を展開しているサークルで、2011年度に大学院生向けの講義の中から誕生し、2014年に設立4年目を迎えました。北海道大学が学生生活をより充実させる学生自主企画を支援する「北大元気プロジェクト」に今年度4年連続で採択されています。

解説を行った7日と8日の2日間では、以下の学生が展示解説を担当しました。

「ヒグマについて知ってみよう！」

(阿部光子・経済学部3年)

「氷の海の民のお話」(岸百合子・文学部3年)

「海底の世界」(江口剛・水産学部2年)

「未来を担う新たな燃料～バイオマス燃料～」

(岩崎峻・水産学部2年)

「牛」(井宮汀士郎・教育学部1年)

2階考古学ミュージアムラボでの「氷の海の民のお話」では、全体の展示解説では伝えき

れなかった内容を個別に解説したり、3階獣医学骨格標本「牛」では小学生グループ向けに解説内容を変更するなど、柔軟に対応することができました。いつも支えてくださる博物館の先生方、解説を聴いてくださった来館者の皆さま、そして今回宣伝などでサポートして下さった北大祭事務局の皆さま、ありがとうございました。

雲中 慧
(水産学部2年)



海底資源の一つ、海底熱水鉱床について解説する

「北大エコキャンパス観察会 ―サクシュコトニ川沿いの遺跡・花・虫―」

●2014年6月23日



はじめてのスイーピング

1972年6月に開催された国連人間環境会議を記念して、日本では6月が環境月間に指定されています。この環境月間の恒例行事として、今年も6月23日(土)に「北大エコキャンパス観察会 ―サクシュコトニ川沿いの遺跡・花・虫―」を開催しました。

当日は晴天に恵まれ、36名の皆さんにご参加いただきました。高橋英樹教授(植物学)、大原昌宏教授(昆虫学)、そして私の三人がガイドとなり、サクシュコトニ川の流れに沿って北大構内を散策しました。サクシュコトニ川の語源は、「サクシュ」=「浜(この場合は豊平川の

川岸と解釈されている)のほうを通る」と「コトニ」=「くぼ地」という2つのアイヌ語で、「くぼ地を流れる川のうち豊平川に最も近い川」と意識されています。

道すがら見られる草花や昆虫について解説・観察するとともに、遺跡の発掘調査跡―遺跡は発掘することで破壊されてしまいます―でそこにあった遺跡とそこで暮らした人々について紹介しました。大原教授によるスイーピング(草の上にいる昆虫を網ですくって集める採集法)の妙技を見たお子さんからは、「私もやってみたい」との声が挙がりました。また高橋教授のさまざまな植物に関する解説では熱心にメモや写真を取る方が大勢いらっしゃいました。

北大構内の自然と歴史の豊かさ、そして北大キャンパスの広さを体感いただけたものと思います。「北大エコキャンパス観察会」は今後も継続を予定しています。来年の6月、皆さんも足を運ばれてはいかがでしょうか。

江田真毅
(研究部講師／考古学)



北大構内の現生林をバックに解説する高橋教授

カルチャーナイト2014
「チェンバロと星空の夕べ」

●2014年7月18日

カルチャーナイトとは、札幌の夏の一夜、公共施設などを夜間開放し市民の方々に地域の文化を楽しんでいただくイベントです。総合博物館では、2004年度から毎年カルチャーナイトに参加しています。今年も7月18日(金)に「チェンバロと星空の夕べ」を開催し、開館時間を21時まで延長して展示を公開しました。カルチャーナイト1週間前には、夏季企画展示「学船 洋上のキャンパスおしよる丸」が開幕していて、仕事帰りに企画展を見に来てくださった方も多くいらっしゃいました。

18時開演のチェンバロ演奏会は3つのプログラムで構成され、リハーサルの段階から席が埋まり、開演時には立見の方々も多くみられました。宇宙の4Dシアターも定員をはるかに上回る人気で、事前に配布する整理券を求め長

北海道大学
ホームカミングデー 2014

●2014年9月28日

北海道大学の同窓生などをキャンパスにお招きして交流を深め、本学の今を知っていただく「北海道大学ホームカミングデー 2014」が9月28日に開催されました。オープニング会場では、藤田良治助教が制作した北大を紹介する映像作品が上映されました。総合博物館では、企画展「学船 洋上のキャンパスおしよる丸」と中谷宇吉郎展示ガイドツアーに多くの方がご参加下さいました。また、一昨年・昨年に引き続き、北大ミュージアムクラブMouseionの学生達が展示解説を行いました。担当した



「牛」について解説する学生



宇宙の4Dシアター

蛇の列ができていました。演目は「天かける単身赴任 一織女星と彦星」で、夏らしい夜空の話を聴くことができました。

博物館前では札幌星仲間による夏の星座の観察会が行われ、多くの方々が様々な望遠鏡を覗き、望遠鏡によって少しずつ異なる見え方をする天体の姿を楽しみました。

毎年恒例のこれらの企画に加え、今年は博物館コミュニケーション特論Ⅰを受講した学生による"Hello, Museum!"が博物館南側のウッドデッキで開催されました(本誌6頁参



夏の星座の観察会

照)。会場では学生と一緒に工作をする企画があり、親子連れの来館者に好評でした。企画展示「学船 洋上のキャンパスおしよる丸」に因んだ、おしよる丸乗船実習生の制服を着ての記念撮影会もありました。

今年のカルチャーナイトも沢山の方にご参加いただき、様々な企画を楽しんでいただきました。

西本結美
(研究支援推進員)



解説終了後に
卒業生と歓談

のは次の4名で、それぞれが関心のある分野、専門に学んでいる分野について、解説シナリオの作成、博物館教員らによるシナリオの監修、ビデオレッスンなどを通したコミュニケーション方法の検討などの準備を重ねて解説に臨みました。

「氷の海の民のお話」(岸百合子・文学部3年)
「未来を担う新たな燃料～バイオマス燃料～」(岩崎峻・水産学部2年)
「北大の全人教育」(雲中慧・水産学部2年)
「牛」(井宮汀士郎・教育学部1年)

ミュージアムクラブの他メンバーが解説をサポートし、いずれの回も、卒業生やさまざまな年代の来館者が熱心にご参加下さり、学生が活躍する大学博物館らしい取り組みとして、ご好評をいただきました。解説終了後にも質問や感想をお寄せ下さったり、卒業生からは当時の学生生活についてもお話しいただき、展示室で和やかな交流の場が生まれました。

湯浅万紀子
(研究部准教授／博物館教育学)

平成26年度 前期記録

平成26年4月から平成26年9月までに
行われたセミナー・シンポジウム

バイオメティクス市民セミナー
「モスアイフィルムの意外な可能性」
魚津 吉弘 (三菱レイヨン(株))
日時:4月5日(土) 13:30～15:00
参加者:30名

北大総合博物館土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「外来アライグマ対策を通して
見える人間社会」
池田 透 (文学研究科 教授)
日時:4月12日(土) 13:30～15:00
参加者:55名

バイオメティクス市民セミナー
「花粉を真似た材料」
Olaf Karthaus (千歳科学技術大学 教授)
日時:5月3日(土) 13:30～15:00
参加者:65名

北大総合博物館土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「高次脳機能障害とリハビリテーション」
生駒 一憲 (医学研究科 教授)
日時:5月10日(土) 13:30～15:00
参加者:70名

「地質の日」記念企画展示関連セミナー
「最近の地図と地理情報システム(GIS)」
山岸 宏光 (愛媛大学GIS研究会)
日時:5月11日(日) 13:30～15:00
参加者:60名

「地質の日」記念企画展示関連セミナー
「地図と重力」
吉田 賢司 (国土地理院測地部)
日時:5月17日(土) 13:30～15:00
参加者:45名

「地質の日」記念企画展示関連セミナー
「ライマンはなぜ開拓峠で道に迷ったか
―江戸末期～明治初期の地形図事情―」
地徳 力 (科学史家)
日時:5月24日(土) 13:30～15:30
参加者:70名

バイオメティクス市民セミナー
「数学とバイオメティクス」
久保 英夫 (理学研究院 教授)
日時:6月7日(土) 13:30～15:00
参加者:40名

北大総合博物館土曜市民セミナー
「正法眼蔵随聞記と物理学
～ roll over Negroponte」
石橋 晃 (電子科学研究所 教授)
日時:6月14日(土) 13:30～15:30
参加者:40名

バイオメティクス市民セミナー
「鳥とバイオメティクス」
山崎 剛史 (山階鳥類研究所)
日時:7月5日(土) 13:30～15:00
参加者:40名

北大総合博物館土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「映像で見るおしよる丸Ⅳ世」
藤田 良治 (総合博物館 助教)
日時:7月12日(土) 13:30～15:00
参加者:65名

バイオメティクス市民セミナー
「生物が利用する音・振動の
バイオメティクス」
高梨 琢磨 ((独)森林総合研究所)
日時:8月2日(土) 13:30～15:00
参加者:40名

バイオメティクス市民セミナー
「撥水/撥油材料の最新研究動向」
穂積 篤 ((独)産業技術総合研究所)
日時:9月6日(土) 13:30～15:00
参加者:30名

北大総合博物館土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「美術の北大展
―北海道大学所蔵作品悉皆調査報告―」
北村 清彦 (文学研究科 教授)
日時:9月13日(土) 13:30～15:00
参加者:60名

ワークショップ
「三岸好太郎と北海道大学構内」
寺門 臨太郎 (筑波大学)
地家光二 (北海道立三岸好太郎美術館)
苫名直子 (北海道立文学館)
池上重康 (北海道大学)
日時:9月14日(日) 9:30～16:30
参加者:40名

平成26年4月から平成26年9月までに
行われたパラタクソミスト養成講座

土器パラタクソミスト養成講座(初級)
小野 裕子
日時:5月17日(土) 定員:10名
対象:大学生以上・一般(参加者10名)

昆虫セミパラタクソミスト養成講座(初級)
神戸 崇
日時:5月18日(日) 定員:10名
対象:小学生以上・一般(参加者15名)

鉱床パラタクソミスト養成講座(初級)
松枝 大治
日時:5月31日(土)～6月1日(日) 定員:10名
対象:一般・学生(参加者12名)

プラスティネーション
パラタクソミスト養成講座(中級)
三橋 弘宗
日時:6月7日(土)～8日(日) 定員:10名
対象:自然史系の大学生・院生・教員・
学芸員等(参加者11名)

岩石パラタクソミスト養成講座(初級)
在田 一則
日時:6月14日(土)～15日(日) 定員:10名
対象:中学生以上・一般(参加者10名)

海藻パラタクソミスト養成講座(初級)
阿部 剛史
日時:6月28日(土) 定員:10名
対象:中学生以上・一般(参加者9名)

鉱床パラタクソミスト養成講座(中級)
松枝 大治・鳥本 准司
日時:7月5日(土)～6日(日) 定員:6名
対象:高校生以上の初級講座終了者
(参加者6名)

昆虫パラタクソミスト養成講座(初級)
大原 昌宏・稲荷 尚記
日時:7月12日(土)～13日(日) 定員:12名
対象:中学生以上・一般(参加者9名)

宝石パラタクソミスト養成講座(初級) in 小樽
松枝 大治
日時:7月19日(土) 定員:10名
対象:中学生以上・一般(参加者20名)

野外地質見学・採集会
松枝 大治
日時:8月3日(日) 定員:40名
対象:小学生以上・一般(参加者35名)

岩石パラタクソミスト養成講座(中級)
在田 一則・鳥本 准司
日時:8月9日(土)～10日(日) 定員:10名
対象:高校生以上・初級修了者(参加者8名)

遺跡出土遺物・木製品
パラタクソミスト養成講座(初級)
守屋 豊人
日時:8月30日(土) 定員:15名
対象:中学生以上・一般(参加者5名)

土器パラタクソミスト養成講座(中級)
小野 裕子
日時:9月13日(土) 定員:10名
対象:大学生以上(参加者8名)

鉱床パラタクソミスト養成講座(上級)
松枝 大治・鳥本 准司
日時:9月13日(土)～14日(日) 定員:4名
対象:高校生以上・中級修了者(参加者5名)

岩石パラタクソミスト養成講座(上級)
在田 一則・鳥本 准司
日時:9月20日(土)～21日(日) 定員:5名
対象:岩石中級修了者(参加者6名)

遺跡出土遺物・木製品
パラタクソミスト養成講座(中級)
守屋 豊人
日時:9月27日(土) 定員:15名
対象:初級修了者・中学生以上一般
(参加者2名)

哺乳類パラタクソミスト養成講座(中級)
大森司 紀之・太子 夕佳
日時:9月27日(土)～28日(日) 定員:10名
対象:中・高の生物の先生、
博物館・埋文センター等の学芸員、
野生動物学関係の大学生・院生委
(参加者10名)

入館者数(平成26年4月～平成26年9月)

	入館者数	見学 団体数	解説の 件数	企画展示(略称)
4月	7,480	9	2	ツイン・タイム・トラベル 地図の語る多様な世界(4/22～)
5月	9,762	23	5	ツイン・タイム・トラベル(～5/11) 地図の語る多様な世界
6月	10,725	23	0	地図の語る多様な世界(～6/8)
7月	11,086	23	4	学船(7/11～)
8月	19,863	15	1	学船
9月	10,682	19	9	学船 三岸好太郎と札幌の山(9/8～9/28)

お礼

以下の方々に当館ボランティアとして学術標本整理作製・展示準備等で協力いただきました。謹んで御礼申し上げます(平成26年4月1日～平成26年9月30日)

(敬称略)

●植物標本

蝦名順子, 大澤達郎, 大高洋平, 大原和広, 小笠原 誠, 加藤康子, 桂田泰恵, 加藤典明, 金上由紀, 黒田シヅ, 佐藤広行, 鈴木順子, 須田 節, 高橋美智子, 徳原和子, 栃原行人, 藤田 玲, 船迫吉江, 星野フサ, 松井 洋, 村上麻季, 吉中弘介, 与那覇モト子

●菌類標本

石田多香子, 菅 妙子, 齋藤美智子, 外山知子, 丸山満枝

●昆虫標本

青山慎一, 阿久津公祐, 植田俊一, 梅田邦子, 榎本 尊, 川田光政, 喜多尾利枝子, 久万田敏夫, 黒田 哲, 佐藤園男, 志津木真理子, 高橋誠一, 問田高宏, 鳥山麻央, 永山 修, 古田未央, 松本侑三, 宮本昌子, 村田真樹子, 村山茂樹, 山本ひとみ, 芳田琢磨

●考古学

安 翔宇, 石田有莉子, 岩波 連, 大泰司紀之, 鹿島さく美, 神田いずみ, 木村則子, 久保田 彩, 斉藤理恵子, 佐々木征一, 佐藤美恵, 末永義圓, 瀬尾涼太, 高崎竜司, 田中公教, 長瀬のぞみ, 中野 系, 成田千恵子, 西本結美, 二瓶寿信, 堀睦, 三芦真衣, 村岸恵美

●地学

在田一則, 生越昭裕, 加藤典明, 加藤義典, 加藤利佳, 堺 俊樹, 酒井 実, 嶋野月江, 塚田則生, 寺西辰郎, 松田義章, 三嶋 渉, 山崎敏晴, 山本ひとみ

●メディア

飯島正也, 河本恵子, 佐藤美恵, 手塚麻子, 中村翠珠, 三嶋 渉

●化石

朝見寿恵, 安 翔宇, 安藤匠平, 飯島正也, 池上 森, 石崎幹男, 石橋七朗, 今井久益, 岡野忠雄, 尾上洋子, 加藤利佳, 金内寿美, 木村聖子, 木村映陽, 久保孝太, 久保田 彩, 栗野里香, 近藤知子, 近藤弘子, 酒井 実, 榊山 匠, 園部英俊, 高崎竜司, 田中公教, 田中嘉寛, 千葉謙太郎, 塚田則生, 手塚麻子, 寺田美矢子, 寺西育代, 寺西辰郎, 内藤美穂子, 中島重大, 長瀬のぞみ, 中野 系, 八丁目清之, 八丁目文枝, 林 純二, 古井 空, 堀 睦, 前田大智, 森 淑子, 山下暁子, 吉田純輝, 吉水久乃

●北大の歴史展示

石川満寿夫, 石黒弘子, 寺西辰郎

●展示解説

在田一則, 飯島正也, 石橋七朗, 小野一成, 児玉 諭, 榊山 匠, 佐藤綾乃, 園部英俊, 高崎竜司, 武石 充, 田中公教, 田中嘉寛, 千葉謙太郎, 塚田則生, 寺西辰郎, 中野 系, 成田敦史, 西川笙子, 西澤亜紀, 沼崎麻子, 濱市宗一, 村上龍子, ロバート・クルツ

●翻訳

ロバート・クルツ

●平成遠友夜学校

石川満寿夫, 石黒弘子, 柿本恵美, 木村則子, 齋藤美智子, 城下治子, 高山緋沙子, 竹内元

信, 田中敏夫, 中井玉仙, 沼田勇美, 牧野小枝子, 村井容子, 山岸博子

●4Dシアター

小松麻美, 今野成捷, 高山緋沙子, 田中公教, 塚田則生, 平田栄夫, 福澄孝博, 牧野小枝子, 山本大貴

●ポブラチェンバロ

浅川広子, 石川恵子, 遠藤麻衣子, 長田大夢, 小野敏史, 清水聡子, 新林俊哉, 高橋友子, 谷川千佳子, 長竹 新, 中村会子, 新妻美紀, 野村さおり, 福士江里, 藤田まりこ, 堀内麻衣, 松田祥子, 雪田理菜子

●図書

伊藤ますみ, 岡西滋子, 児玉 諭, 今野成捷, 齋藤美智子, 須藤和子, 高木和恵, 谷岡みどり, 田端邦子, 中井稚佳子, 沼田勇美, 久末進一, 鮎田久意, 星野フサ, 本名百合子, 村上龍子, 安田 正, 山岸博子

●第二農場

石田多香子, 石川満寿夫, 城下治子, 竹内元信, 寺西辰郎, 成田千恵子, 濱市宗一

●水産科学館

井口詩織, 伊藤慧, 岩井卓也, 石見裕太, 奥香奈美, 小野寺拓真, 金子尚史, 河合 駿, 川畑 達, 亢 世華, 菊地優, 木村克也, 工藤怜子, 佐近 慈, 櫻井慎大, 佐々木嘉子, 島田英憲, 杉原菜月, 高岸愛実, 棚野秀平, 中嶋 実, 中原隆史, 成田留衣, 松川広樹, 三上大樹, 山田翔平, 山本佑樹, 和田 茜

●企画展示「学船」

浅川広子, 石黒弘子, 石田多香子, 児玉 諭, 塚田則生, 寺西辰郎, 西川笙子, 濱市宗一, 森 淑子, 伊藤 慧, 岩崎 峻, 江口 剛, 雲中 慧, 佐近慈, 中原隆史, 山内彩加林, 山中智樹, 山下智子

[表紙写真]

入館者100万人記念セレモニーの様子。左より津曲敏郎館長、青柳元子さん、100万人目となった青柳久信くん、山口佳三北大総長。